

カナダ在住華人の就学前教育カリキュラム

－何を教え、何を教えないか－

楠 山 研*

Early Childhood Education for Chinese in Canada:

What should be taught? What shouldn't?

Ken KUSUYAMA

1. はじめに

2012年のデータ¹によれば、カナダの永住許可を認められた人 (Permanent Residents) は1年間で25万7887人に達する。この10年間の年平均は24万9455人であり、約4年で100万人を受け入れるというハイペースが続く、移民受け入れ超大国である。2012年にカナダの永住許可を認められた人の出身国をみると、中華人民共和国、フィリピン、インドが多く、この3か国だけで全体の約37%を占めている。このうち中華人民共和国出身者が最も多く3万3018人であり、さらに台湾から1163人、香港から1093人、マカオから50人、その他例えば東南アジア諸国からの移民の一定程度は中国系の人々であることも含めて考えると、いわゆる中国系移民は、カナダにおける移民の中で最大勢力といえることができる。カナダに住む中国系の人々は100万人を超えており²、とくに多いトロントやバンクーバーでは、中国系が全人口の1割を超えている³。世界中に住む中国系の人々は国籍などにより、華人、華僑、華裔などの呼び名があるが、ここでは中国系のルーツをもって海外に住む人々の総称として「華人」を用いることにする。

ちなみに、2012年に日本出身者でカナダの永住許可が認められたのは1307人である。カナダに住む日本人あるいは日本出身者の子どもは、その滞在期間に関わりなく、ほとんどがカナダの現地校やインターナショナルスクールに通っている。こうした日本人子弟に日本語で教育を受ける機会を提供する機関には、全日制の日本人学校と土曜日や放課後に授業を提供する補習授業校などがある。海外子女教育財団のウェブサイトによれば、カナダには全日制の日本人学校は存在せず、補習授業校が大都市を中心に10校あるのみである⁴。例えばトロント補習授業校は、1973年にトロント商工会が設立した、法令に基づかない、オンタリオ州から認可を受けた団体として運営されている。現地の公立学校の校舎を借りて、小学部、中学部、高等部ともに日本の教科書を使用し、毎週土曜日に1日6時間、年40日間の授業を実施する他、運動会や各種行事など、日本の学校で行われるような活動もとりに行われている⁵。このように、カナダに住んでいる日本人あるいは日本出身者の子どもは基本的に、平日は現地校あるいはインターナショナルスクールに通い、そのうち一定数が必要に応じて土曜日などに補習授業校などで日本の教育を受けていることになる。

* 教育学部人間発達講座

それでは、150年以上前から移民してきた人々がおり、なおかつ現在もカナダにやって来る移民の最大勢力である中国系、つまり華人の人々は、自らの子どもたちへの教育についてのどのように考えているのであろうか。基本的には華人の子どもも、日本の子どもと同様に、そのほとんどが現地の学校に通い、カナダの学校制度の中で学歴を積み重ねることになる。移民という形をとることが多い華人の場合、この傾向はさらに強いものとなろう。しかし、古くから世界中に渡った華人は、現地に溶け込む一方で、強力なコミュニティを形成して、自らの言語や文化を伝承してきた。もちろんカナダでも、そうした伝統が形作られている。古くからカナダに住む人々がおり、現在もその数が増え続けているカナダ在住華人の子どもたちに、現在、中国語や中華文化の教育はどのような意図をもって、どのように行われているのであろうか。またその学習内容は、例えば中国大陸で学ぶ場合とどのような違いがあるのであろうか。

本稿では、カナダ在住華人の教育について、後に記す理由により、とくに就学前教育のカリキュラムに注目しながら検討する。まず、世界中に住む華人が、各地でどのような教育をしているのかをまとめた上で、就学前教育カリキュラムに注目する理由を述べる。続いて、カナダにおける華人の歴史的状況を確認した上で、カナダにおいて最も華人が多いトロントにおいて、子どもたちがどのように中国語や中華文化を学んでいるのかについて、中国大陸系の幼稚園のカリキュラムをもとに検討する。また平日に現地校に通っている子どもたちが、週末に中国語を学ぶための台湾系の中国語学校も参考として加えながら、カナダで中国語や中華文化を教える際の特徴や、中国大陸系・台湾系のそれぞれの教育のせめぎあいの部分についても言及する。こうして、カナダで生きていくために華人が必要と考え、子どもに教えていることについて整理し、検討する。

2. 世界各地に住む華人が子どもに教えたいたいもの

世界における華人教育に関する先行研究としては、古くは市川⁶、新しいものでは大塚⁷などの国際比較研究がある。また、カナダ在住の華人の教育については、カナダを多文化社会ととらえ、これを中国系に限らないマイノリティの教育という視点から注目している児玉⁸、中国系移民やその子どものアイデンティティ変容に関する調査がある大岡⁹、香港からの移民について検討した谷垣¹⁰などがある。本研究は、これらを踏まえた上で、華人の就学前教育に特化し、なおかつそこから華人が考える教育の普遍的な内容や、滞在国の教育の特色を見つけ出す試みである。

華人は、世界中に居住し、強固なネットワークを有し、中国系としてのアイデンティティを重視しつつ、現地での成功をめざしている。そのために教育が果たす役割は大きいと考えており、教育熱心で、子孫に必要と思われることを積極的に教え、時には滞在国の状況や風土に合わせて柔軟に形を変えてきた。例えば、現地の公的カリキュラムの中に中国語の授業を組み込ませるケース、中華学校などの現地教育施設を作るケースや、マレーシアのように現地の教育体系とは別に華人のための教育体系を構築するケースなど様々である¹¹。

その華人が先進国に滞在している場合、その国の教育システムの中で学歴を積み重ねていくケースが多く、子どもたちは小学校から現地の学校に通い、現地の子どもと一緒に教育を受けることになる。こうした華人が教育に求めるもの、つまり子どもに身に付けさせ

たいと思っていることを明らかにしたい時、注目できるのが就学前教育の段階である。一般に幼稚園などの就学前教育機関は、小学校などに比べて小規模であり、現地教育行政の縛りが少ない。よって、華人が自らのコミュニティの中に設置するなどして、子どもに受けさせたい教育を比較的思い通りに実施できる場所といえる。

また、華人は一般に、就学前教育を小学校に入学した時に遅れをとらないための準備教育と捉えており、どこに住んでいても小学校以降の教育を前倒ししておこなう傾向がある。例えば、読み書き計算だけでなく、コンピューターや英語を含め、綿密な時間割を編成し、教科書を用いて、確実に習得させることを当然のこととしている¹²。

それでは、先進国に在住する華人は就学前教育の段階において、子どもにどのようなことを教えたいと考えるであろうか。これは例えば、①華人の考える、教育の普遍的内容（読み、書き、計算ほか）、②華人のアイデンティティ保持のための内容（漢字、道徳、中華文化ほか）、③滞在国の小学校入学準備の内容（現地語、マナー・振る舞いほか）などが考えられる。

ここで整理された①②は、華人が海外で誇りを持って、たくましく生きていくためのものであり、在外華人版「生きる力」ということができる。また、③に整理されたものは、華人の目から見た、現地学校で成功するために不可欠なものであり、華人の考えるその国の教育の本質、核となる部分ということになる。例えばカナダの学校で成功するには、小学校に入学するまでに子どもに何を身に付けさせておかなければならないのかを、華人の強固なネットワークによる長年にわたる綿密な分析で導き出したものが、就学前教育のカリキュラムということができよう。

つまり、カナダの華人の就学前教育カリキュラムをみれば、華人の長年の経験から編み出された、カナダの学校制度で成功するための「合理的」な内容がみえてくると考えられる。

3. カナダにおける中国系移民の歴史

カナダにおける中国系移民の歴史は1858年にブリティッシュコロンビア州フレーザー川流域で始まったゴールドラッシュに、アメリカ・カリフォルニア州の中国人金鉱山労働者が移住してきたことに始まるとされている。その後、中国から直接移民する者が増え、鉱山の他、農漁業、大陸横断鉄道建設などに携わる者が多かった。こうしてビクトリアやバンクーバーといった西海岸だけでなく、内陸部にも小さなチャイナタウンが建設されるようになった。こうした中国系移民は次第に白人の労働場所や純粋性を脅かすものと認識されるようになって税金徴収や排斥の対象となり、1923年には中国人の移民を実質的に禁止する法律ができた。1947年まで続いたこの法律により、中国系移民はチャイナタウンの中に閉じ込められ、差別と排斥の中で限られた労働に従事することになった。第2次大戦後は市民的権利が回復し、高学歴と勤勉さを背景に急速にカナダ国内での地位を高めていった¹³。

トロントに中国系社会が形成されたのは西海岸都市よりも遅れて20世紀に入ってからであり、1910年ごろにチャイナタウンができあがったといわれている。その後も徐々に中国系移民は増加していくが、トロントでは急激な増加は見られず、差別と排斥の時代にも目立った排斥運動さえ起らないという、完全に無視された存在であった。この状況が変わるのは、トロントが中都市からカナダ第一の産業都市に発展していく過程であり、1967年の移民法

改正後に香港からの移民がトロントに向かうようになって急速に拡大していった。1970年代末にはバンクーバーを抜いてカナダ最大の華人人口を持つようになり、チャイナタウンも観光名所となるまでに拡大した。1980年代以降には、香港の中国返還に伴う香港市民の移民熱と、資産を持った香港市民を受け入れようとするカナダ政府の政策により、カナダへ移民する人々が急増した。その際、約半数がトロントを選んだため、1990年代半ばには華人人口が総人口の1割を超え、そのうち3分の2が香港出身者となった。もともと香港で豊かであった層が多かったため、トロントでも積極的な経済活動をおこない、トロント北東部のかつて高級住宅街であった地域が新しい華人居住地域となった。その後は、中国大陸からの移民が増加している。こうして、トロントにおける華人グループは、さまざまな出身のさまざまな階層の人々からなり、もはや単一のグループとはいえないほどの多様性をもっている¹⁴。

こうしてできたカナダの華人グループを森川は4つに分類している。すなわち、(1)富裕で高い適応力をもつ中流・上層中流層を形成する最大多数の香港系グループ、(2)同様に豊かな台湾系や一部の大陸系エリート、(3)適応力が弱く、旧来のチャイナタウンを再現しがちな多くの大陸中国系やインドシナ難民、(4)カナダへの同化が著しい旧移民の二、三世たち、である¹⁵。

このように華人は、カナダ全体においても、最も多く住むトロントにおいても、その特徴をとて一言では言い表すことのできない多様性をもっており、その多様性は現在さらに増している状況にある。

4. 華人が最も多く住む都市、トロントにおける中国語教育機関

このように、一口に中国系や華人と言い表すことのできない多様性をもった人々の子どもは、それぞれの経済状況や今後の方針、言語状況、居住環境などに基づいて、カナダで教育を受けている。基本的には現地の学校に通っているが、就学前教育や放課後、週末、あるいは通信・ネットワークといった方法で中国語や中華文化を学んでいる人々も少なくない。

カナダに住む華人、あるいはこれからカナダに移民しようと考えている人々のための中国語サイトの一つである「加拿大華人黄页（カナダ華人イエローページ）¹⁶」には、トロントに限定したサイトがある。ここでは華人がトロントで生活するために必要な情報が中国語で得られるようになっている。そのうち教育に関するページには、公立私立を含めて幼稚園から大学、補習学校などの情報が掲載されている。例えば、中国語学校（原語は「中文学校」）には、53の学校が紹介されている。その中には、才能開発をおこなう学校、マルチメディアを利用した通信制の学校、語学学校、芸術学校などがあり、さまざまな需要に応える学校が設置されている。本稿では、このサイトに掲載されており、様々な年齢層の人々にさまざまなレベルで中国語や中華文化を教えているT中国語学校が運営する幼稚園に焦点を当てることにする。

5. トロントにおける大陸系幼稚園

T中国語学校¹⁷は、オンタリオ州認可のトロントに総本部を置く学校であり、華人とその子女および中国語の学習や中華文化の理解に関心のある人々（中国人の子どもを養子にしているカナダ人を含む）に向けて、簡体字、中国標準語、ピンインの発音を系統的に教授す

る中国語教育専門の機関である。対象は幼児から成人までと幅広く、中国語と英語によるバイリンガル幼稚園、放課後の補習教育、週末中国語学校、中国語サマースクール（原語は「中文夏令營」）、成人のための中国語クラス、幼児のための中国語啓蒙教室などを開いている。

この学校は 2001 年末に中国大陸出身の数名が始めたもので、繁体字と広東語が主流を占めていたトロントにおいて、中国標準語、簡体字、ピンインの発音を用いた中国語教育をおこなってきたという特徴がある。専業兼業含めて 40 名以上の教員、1000 名近い学習者がおり、トロント市の中心部、北部など華人が多く居住する 4 か所を主な拠点として教育活動をおこなっている。

（1）幼稚園の設置場所によって異なる園児とカリキュラム

この学校が運営する幼稚園は 4 園あり、基本的な教育方針は同じであるが、それぞれの園が設置されている地域によって通ってくる子どもたちの傾向が異なるため、結果的に異なる教育が行われている。例えば、北部の園がある地区は、移民してきてあまり時間の経っていない人々が多く居住している場所である。よって、両親ともに中国で生まれており、家庭で中国語を使用している子どもが多く、中には中国で教育を受けてきた子どももいるため、子どもの中国語力の維持・発展を目的とした、中国大陸とかなり似た雰囲気幼稚園教育がおこなわれている。

一方、市の中心部のチャイナタウン近くにある幼稚園は、かなり状況が異なっている。現在通っているほぼすべての子どもがカナダ生まれであり、そのほとんどが父母もカナダ生まれである。よって 95%程度の子どもの中国語を一応聞くことはできるが、話せないという状況にある。その中には、いわゆるハーフの子どもも多くおり、どちらの親も華人ではない子どももいる。これは早期バイリンガル教育の流行と、中国の経済発展による中国語の国際的地位の向上により、英語やフランス語の他に、子どもに中国語を身につけさせたいと考える親が増えていることがその要因とみられる。こうした状況にあるため、中国語の教育レベルも当然、そこにいる子どもたちに合わせたものとなっている。例えば、中国系の幼稚園といえば通常、漢字を熱心に教えており、小学生並みの文章を書いた園児の作文などが壁に掲示されている光景がよくみられるが、この市の中心部の幼稚園では、漢字を書く一步手前の「横一文字、縦一文字、はらい」のみを書いたものが作品として掲示されていた。

このように、カナダに住む華人がもともと多様であり、さらにその多様性が増している状況を反映して、トロント市内にある同じ系列の幼稚園であっても、それが存在する地区によって、通ってくる子どもたちの傾向が大きく異なり、結果的にそこでおこなわれる教育も異なったものとなっている。さらに、市の中心部の園には華人以外の人々も通うようになってきており、華人幼稚園に通う子どもやカリキュラムの多様性にインパクトを与えている。

（2）市の中心部にある華人幼稚園

以下は、市の中心部にある幼稚園に焦点を当て、カナダにおける華人幼稚園の特色を確認する。市の中心部の幼稚園は、チャイナタウンの一角にある公立学校の校舎の一部を借りて運営している。その学校の児童らと同じ入り口を利用しており、親に連れられてやってきた子どもたちはインターホンを押して、中のモニターで確認されてから中に入る。この学校の入り口にある歓迎の意を示す案内板には、上から英語、ベトナム語、中国語が書かれており、

この付近にベトナム出身の人々も増えていることがみてとれる。中心部といっても緑の多い公園の中にあるため、周囲にはカナダの国旗にも描かれているメープルの木が茂り、野生のリスが走り回るような場所である。この公園にある野球場では、早朝、華人のお年寄りが集まって太極拳をするという、中国の日常といえる風景が見られた。幼稚園には幼児のための園庭もあり、メープルの木やリスと触れ合いながら、遊具で遊べるようになっている。

この幼稚園は、オンタリオ州の認可を受けたチャイルドケアセンターである。2013年12月まで下りている認可によると、31か月から5歳までの段階の子どもたちへのプレスクールとして合計48人の子どもの受け入れが認められている。この園では主に4歳児のための小班（Child Care）と、主に5歳児のための大班（Kindergarten）の2学年計2クラスで運営している。小学校の空き教室を利用しているため、1つの教室をいくつかのコーナーに分けて使用している。例えば小班は、大きく6つ、輪になって座れる比較的広いスペースの他、科学のコーナー、作業をするコーナー、遊ぶコーナー、自由活動のコーナー（室内用の砂場がある）、教師のコーナー（パソコンがある）からなっており、棚などで区切り、テーマに関連するカーペットをひいて、雰囲気を出している。壁の掲示は、子どもたちの作品の他は、簡単な中国語の歌の歌詞や、学校、友達（朋友）、助ける（帮忙）、手を挙げる（举手）、分け合う（分享）、かたづける（收拾）、僕わかった（我認識）といった、日ごろの活動で使う単語がピンイン付きで書かれている程度であり、一般的な中国系の幼稚園に比べると抑え気味という印象を受けた。本のコーナーには中国語と英語の絵本が同じ割合で並べられていた。

（3）華人幼稚園にみられる「中国的な」もの、「カナダ的な」もの

この幼稚園において、「中国的な」ものとして指摘できるのは、言語と子どもたちに教える中華文化である。言語については、基本的にすべてのカリキュラムで中国語を扱っている。英語を使用する時間はごく限られており、主に4歳児のための小班では週に1回、英語の歌を歌う時間があり、主に5歳児のための大班では週に2回、30分間の英語を書く時間がある他は、週に1回、保護者がボランティアとして来園し、30分間英語の絵本の読み聞かせをする時間があるのみである（表1、表2を参照）。なお、中国語の発音記号であるピンインについては、園児に直接教えることはしていないが、子どもたちは英語を理解しているため、絵本などにピンインが載っている場合、その文字から発音を想像して発声するということであった。これは英語圏に住む子どもたちならではの反応、ということができよう。

子どもたちに教える文化については、中国大陸と台湾の関係が複雑であり、それぞれが異なる教育をおこなってきたことから、中国の文化として子どもたちに何を教えるかは、非常に難しく、時には政治的な問題を引き起こす可能性をもっている。この園は広東語が主流のトロントにおいていち早く中国標準語や簡体字、ピンインなど、中国大陸で行われている教育をおこなった園であり、設立にも大陸出身者が主に関わっているが、教育内容については、政治的なこと、宗教的なことについては扱わないよう気を遣っている。そこに通っている園児には、中国大陸系、台湾系、その他さまざまな背景を持っている子どもがおり、大陸で行われている教育をそのまま行えば、何らかの問題が発生する可能性がある。また、カナダの慣習との齟齬も全くないとはいえないであろう。よってこの幼稚園で教えるのは伝統的な中華文化に限定しており、尊敬、遵守、中秋節、新年といった内容を扱い、現在のことにつ

いては基本的に教えていない。

表1 ジュニア・プレスクール（小班）時間割（2013-2014）

		月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
7:30am-9:00am		登園&朝のおやつ				
午前	9:00-10:00	戸外活動				
	10:00-10:20	中国語				
	10:20-10:40	創造的な手工				
	10:40-11:15	室内活動（自由遊び）				
	11:15-11:30	音楽クラブ（水曜は英語の歌、それ以外は中国語の歌）				
	11:30-12:00	昼食				
午後	12:00-12:30	お昼休み／静かな活動				
	12:30-2:30	お昼寝				
	2:30-3:10	室内活動（自由遊び）				
	3:10-3:25	科学実験	楽しい算数	楽しい算数	楽しい算数	科学実験
	3:25-3:45	午後のおやつ				
	3:45-4:00	トイレ／着替え				教育テレビ
4:00pm-5:00pm	戸外活動				スポーツ （選択）	
5:00pm-6:00pm	自由活動&降園					

表2 シニア・プレスクール（大班）時間割（2013-2014）

		月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
7:30am-9:00am		登園&朝のおやつ				
午前	9:00-10:00	戸外活動				
	10:00-10:30	中国語（水曜は絵画）				
	10:30-11:00	創造的な手工芸				
	11:00-11:30	室内活動（自由遊び）				
	11:30-12:00	昼食				
午後	12:00-1:30	お昼休み／静かな活動と休憩				
	1:30-2:00	英語書写 練習	漢字書写	漢字書写	英語書写 練習	中国語本の 制作
	2:00-2:30	算数と算数の練習				
	2:50-3:10	科学実験				
	3:10-3:30	午後のおやつ				
	3:30-4:00	中国語読解	音楽と演技	保護者によ る英語本の 読み聞かせ	ダンス	教育テレビ
4:00pm-5:00pm	戸外活動				スポーツ （選択）	
5:00pm-6:00pm	自由活動&降園					

このように、原則として中国語のみを扱っている幼稚園であるが、カナダにあり、州の認可を受けている施設として、「カナダ的な」要素も含まれている。ここでは、州教育省の視察、給食という観点からみていくことにする。

州の認可を受けている幼稚園は1年に1度、子どもたちの健康と安全、成長を支援する意味合いで視察を受けることになっている。視察結果は園の廊下に張り出されており、詳しい情報はオンタリオ州のウェブサイトで確認できる。2013年2月に実施されたこの園の結果は、全9項目のうち8項目が100%であり、「プログラム」項目のみが95%であった。100%に満たないということは、認可にあたって必要なすべてが満たされているわけではないことを意味している。これについては、準備した資料の一部に中国語のみのものがあつたため、視察者が評価できなかつた部分がある、ということであつた。

給食についても、カナダの方式にのっとり対応がとられている。小班、大班ともに毎日実施される給食は、とくに子どものアレルギーや食習慣・宗教的慣習などへの対応について、当局の指示に従つた、厳格な管理がなされている。給食は外部に委託しており、メニューにとくに中国的といえるようなものは見られなかつたが、毎日の昼食やおやつメニューに並べて、アレルギーや宗教的慣習などにより食べられない子どもがいる可能性のある材料が書かれている。また多くのものについて、これらの材料を含まない別メニューが準備されている。例えば、月曜日の昼食メニューにあるスパゲッティとミートボールについては、グルテンを含まないもの、ヴィーガン（純菜食主義者）用、ベジタリアン用、ハラール（ムスリム用）の別メニューが用意されており、酪農製品や卵がメニューに含まれる場合にも別メニューが準備される。なお、市の中心部の幼稚園では箸を使わない家庭が少なくないが、園では大班から給食の時間に箸を使用している。

このように、中国語をメインに扱いつつ、カナダにある施設として、現地の規則や習慣にも合わせた運営をしている幼稚園であるが、実際の教育の場面ではどのような違いがあるのだろうか。具体的には、中国にある幼稚園なら強調しないが、カナダにあり、今後子どもたちが現地校に通うということを意識して教えていることは何か、ということである。この答えとしてあがつたのは、「独立」であつた。例えば中国では祖父母が箸やスプーンをもって、幼児の口まで食事を持っていくという風景がしばしばみられるが、こちらではそうしたことはできるだけせず、子どもが自らできるよう取り組んでいる。また、現地校の教育においては、厳しいイメージがある中国の教員とは異なり、カナダの教員はその結果に関わらず、子どもが自分でおこなつた、ということをはめる傾向がある。こうすることによって、子どもは自信を持つことができ、それがその後の自らの学習の発展につながっていくと考えられており、そうした風潮はこの幼稚園の教員にもみられるものであつた。

6. トロントにおける台湾系補習授業校との比較からみえてくるもの

トロント市内4か所で開かれている C 人文学校¹⁸⁾は、世界各地で学校を運営している台湾の仏教系宗教団体が母体となっており、平日に現地校に通う子どもたちが毎週土曜日に中国語や中華文化を学ぶことができるものである。こちら、土曜日が休みである公立学校の校舎を借りて運営されている。オンタリオ州はこうしたマイノリティや言語への配慮として学校の貸し出しを認めており、この学校はムスリム学校と同時に開講するケースもあるということであつた。

こちらの子どもたちの様子も、学校を開いている地域によって大きく異なっている。中国で生まれた子どもが50%という場所もあり、20%という場所もあり、それは当然、どういった教育をおこなうかにも影響を与えている。以下は市の北東部の華人が多く住む地区で開かれている、中国で生まれた子どもが約50%を占める学校を対象として検討する。

この学校では、幼稚園レベルの幼小(4歳)、幼大(5歳)クラスから、小学校1~6年、中学生以上が学ぶ進修クラスまであり、幼小から小4までは各2クラス、小5以上は各1クラスが設置されている。中国語力は子どものそれまでの環境によって大きく異なるため、単純に年齢で学年を決めることはせず、4歳あるいは入学の際にテストを実施してクラス分けに利用している。最終的には保護者が、中国語の能力に合わせつつ、友人関係を含めた年齢も考慮してクラスを決定する。開学後3週間はクラス変更を可能にしている。なおカナダでは4歳より下のクラスを設置するのに必要なライセンス取得が難しいため、現在は4歳児以上の子どもを対象としている(同団体が運営するアメリカ・ロサンゼルス校では4歳より下のクラスを設置している)。時間割は、朝9時から50分授業が始まり、10分間の休憩を2度はさみつつ、3時間目まで実施され、午前中で終了する。廊下には中国語の絵本などを積んだ簡易図書館がオープンし、中国語の書籍に触れることができる。またボランティアとして高校生が各クラス数名参加していた。ほぼ全員が華人であったが、この学校の出身者ばかりというわけではないようであり、高校の活動の1つとして事実上必須となっているボランティア活動の一環として来ているという生徒が多いようであった。

外から見れば、市の中心部の幼稚園と同じ中国語を扱う学校であるが、扱っている中国語や学習方法は微妙に異なっている。それはまさに中国大陆と台湾の教育の違いである。

ここは母体が台湾にある団体が運営している学校であるため、教育は当然台湾式でおこなわれている。漢字は繁体字を用い、発音は中華人民共和国で発明されたピンインではなく、古くからある注印符号を用いて学んでいる。教科書は、華僑の子弟のための教育援助や留学支援、教材作成をおこなっている台湾僑務委員会が作成したものを使用している。もともとは1年で2冊を終える想定で作られているテキストであるが、ここでは子どもたちの環境や学習時間の制限から、1年で1冊を終わらせるスピードで進められている。また教育方法も現在の中国大陆とは異なる部分が多いため、大陸出身の保護者からは、中国大陆では途絶えてしまったかつての中国の教育がおこなわれているとして評価する声もあるということであった。

参観した日はちょうど開講式がおこなわれており、式では幹部から「中国語と礼儀を学んで、台湾に行って中国語を読めるようにしようね。そうしたらお父さんお母さん喜ぶからね」という低学年への挨拶があった。

中国大陆と台湾は、互いの政治体制が異なることもさることながら、海外における中国語教育や海外から中国圏への留学を志す学生などの、いわゆる「市場」をとりあっているライバルでもある。以前から、主に東南アジアで育った華人の留学生を、中国大陆と台湾双方がその待遇を競って勧誘するなどの動きがあり、こうした傾向は中国大陆が経済発展して以降さらに加速している。例えば、もともと台湾へ行く学生が多かったマカオでは、中国大陆の大学に留学できる統一試験をマカオで実施するなどして、一時期中国大陆への留学生数が台湾を上回り、近年それを台湾がまた挽回するといった激しい攻防がみられている¹⁹。カナダでは、バンクーバーがあるビクトリア州が実施する中国語検定においてピンインを使

用した試験問題を出している。これはすなわち、中国大陸側に有利になる政策となるため、台湾側はそうした動きが他にも広まることを警戒することになる。

こうした水面下の攻防がある一方で、カナダにある学校として、中国大陸系でも台湾系でも変わらないことがある。それは、教育内容において、政治やその他の問題が起こる可能性がある現在の中国の状況については扱わず、子どもたちに教える中華文化は、古いもの、伝統的なものに限っているということである。これは外国にある華人学校ならではのことができよう。

7. おわりに

本稿では、カナダにある華人幼稚園のカリキュラムに注目し、そこでみられる「中国的なもの」、「カナダ的な」ものを確認しながら、華人がカナダで成功するために現在どのような教育をおこなっているのかについて検討した。世界各地で現地に溶け込みつつ、強力なコミュニティを背景に、柔軟に形を変えながら中国語や中華文化の教育をおこなってきた華人の教育の傾向をみたく、就学前教育カリキュラムにその教育を分析する手掛かりがあることを指摘した。カナダにおける華人は、国全体においても、トロントにおいても、その特徴を一言では言い表すことのできない多様性をもっており、その多様性は現在さらに増している。こうした状況を反映して、最も華人が多い都市、トロントにある華人幼稚園では、まず華人自身の多様化による園ごとの教育の多様化が見られ、これに華人以外の人々も加わるようになって、華人幼稚園に通う子どもやカリキュラムの多様性にいっそうインパクトを与えている。こうした面を含め、幼稚園で見ることができる「中国的なもの」、「カナダ的な」ものを整理し、教師の子どもへの態度といった面も含めて検討することで、中国にある幼稚園とは異なる、「カナダにある華人幼稚園」像について考察した。加えて台湾系の補習授業校と比較することで、教育内容において、政治やその他の問題が起こる可能性がある現在の中国の状況については扱わず、子どもたちに教える中華文化は、古いもの、伝統的なものに限っているという、海外の華人学校に共通する様子を確認した。

〔附記〕本研究は、日本学術振興会（JSPS）科学研究費（若手 B）課題番号 25780479 の助成を受けたものです。

〔補記〕本論文は、既発表論文が査読を経て新たに掲載されるものです。

¹ Immigration overview: Permanent and temporary residents, Permanent residents, Canada – Permanent residents by source country. Accessed from: <http://www.cic.gc.ca/english/resources/statistics/facts2012/permanent/10.asp> (Accessed on October 21, 2013).

² Population, by selected ethnic origins, 2006. Accessed from: <http://www.statcan.gc.ca/pub/11-402-x/2012000/chap/imm/tbl/tbl06-eng.htm> (Accessed on October 21, 2013).

³ 森山眞規雄「カナダの華僑・華人」可児弘明・斯波義信・游仲勲編『華僑・華人事典』弘文堂、pp.153、2002年a。

⁴ 公益財団法人海外子女教育振興財団ウェブサイト内「海外の学校北米地域」、

-
- <http://www.joes.or.jp/g-kaigai/gaikoku03.html>、2013年10月21日確認。
- 5 トロント補習授業校ウェブサイト、<http://torontohoshuko.ca/gaiyou/gaiyou.html>、2013年10月21日確認。
 - 6 市川信愛『華僑学校教育の国際的比較研究』宮崎大学教育学部社会経済研究室、1988年。
 - 7 『アジアにおける華人ディアスポラの教育への関与に関する国際比較研究』平成20～22年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書（研究代表者：大塚豊）、2011年。
 - 8 例えば、児玉奈々「多文化主義国家カナダのマイノリティ言語教育の様相—連邦政府移民政策との関連に焦点を当てて」『比較教育学研究』第35号、pp.3-16、2007年。
 - 9 例えば、大岡栄美「トロントの中国系移民二世代の文化変容とアイデンティティ—差異化する『カナダ生まれ』と『外国生まれ』の子どもたち」『移民研究年報』第11号、pp.43-60、2005年。
 - 10 谷垣真理子「カナダへの香港人移民」『東洋文化研究所紀要』157号、pp.156-190、2010年。
 - 11 楠山研「マレーシアにおける華人の教育と華語教育の動向」『アジアにおける華人ディアスポラの教育への関与に関する国際比較研究』平成20～22年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書（研究代表者：大塚豊）、2011年、pp.43-57。
 - 12 例えば台湾については、楠山研「台湾における表現教育」浅見均編『子どもと表現』日本文教出版、2009年、pp.81-82。
 - 13 森山、前掲資料、pp.153-154、2002年 a。
 - 14 森山眞規雄「トロントの華僑・華人」可児弘明・斯波義信・游仲勲編、前掲書、pp.570-571、2002年 b。
 - 15 森山、前掲資料、pp.153-154、2002年 a。
 - 16 「加拿大華人黄页」、<http://www.cn411.ca/>、2013年10月21日確認。
 - 17 以下、T 中国語学校およびこれが運営する幼稚園の情報については、学校ウェブサイト（2013年10月21日確認）および2013年9月の筆者の現地訪問調査による。
 - 18 以下、C 人文学校の情報については、2013年9月の筆者の現地訪問調査による。
 - 19 楠山研「マカオの学校制度—香港、台湾、中国本土との比較を通じて—」『長崎大学教育学部紀要—教育科学—』76号、2012年、pp.24-25。